大庭みな子

霧の旅

第Ⅱ部

大庭みな子

霧の旅

第Ⅱ部

第Ⅱ部

講談社

霧の旅　第Ⅱ部

一九八〇年一一月六日　第一刷発行
一九八一年一月八日　第二刷発行

著　者　大庭みな子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電　話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振　替　東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
定　価　一二〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 大庭みな子　一九八〇年

Printed in Japan　0093-168830-2253 (0)　(文1)

霧の旅　第Ⅱ部

目次

時計 7
像 33
氷 55
雪 79
灰 97
海 117
道 137

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

祭壇 157
嘔吐 179
蛇 199
種子 219
山姥 241
冬眠 259

装幀／田村義也

霧の旅

第Ⅱ部

時計

その頃、どんなふうに暮していたか。

どうして省三は毎日毎日、わたしのところに帰ってくるようになったのか。

ほかに行くところもなく、一人で家で待っているに違いないわたしのことがなんとなく気になっただけのことだろうか。

わたしは突然、無能になった。かつて自分が動かしていたまわりのすべてのものを、省三が動かしてくれるに違いないと期待するようになった。

時計が止っている、床が傾いている、水道の栓がしまらない、どうしてあの黒い鳥は毎日同じ時間に同じ枝に止るのか、風で窓がきしむ、お金がない、寒い、おなかが痛い、頭が痛い、不都合なことはすべて省三のせいのような気がしだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

床か柱か、どちらかの傾きを直そうとすれば、家は崩壊するに違いない。しかし、ピサの斜塔は幾世代もの人間が生まれて死んでも、まだ建っているという噂だから、多分、こんなぼろ家でも、わたしの短かい生涯くらいは大丈夫なのであろう。まして、わたしたちはこの異郷の地でせいぜい一年か二年仮棲いをするだけなのだから、心配することはない。

家中でたった一つの時計が止っている。繁が結婚祝にくれた鳩時計が。わたしは時計に縁がない。母が古風な金の腕時計をくれたが、日本にいる頃、家の中のどこかに置き忘れて、いくら探しても見つからず、何日かして掘火燵の灰の中から出て来た。そしてそれは二度と動かなかった。熱い灰の中から出て来たとき黒く燻っていた金側は磨くと元通りに輝いたので、母にあらがった生き方を選んだことの記念にとってある。

ラジオをつけて時間を合わせようとしたが、スウェーデン語の放送では無駄なような気もしたし、第一、ラジオのつけ方がわからないので放っておいた。わが家でもっとも高価そうに見えるその家具、プレーヤーとラジオの一緒になったその機械は、やたらにボタンがたくさんついていて、どのボタンを押したら、何がどうなるのかさっぱりわからなかった。

わたしは傾いている床を見なくてすむように目を閉じ、水道の蛇口は分解せず、きしむ窓のところには行ってみず、お金のことは忘れ、おなかをおさえて鳥類学の本を買って来なかったことを残念に思いながら、ベッドの中にちぢまっていた。

あの人が帰って来たら直してくれるに違いないわ。しかし、帰ってくるとその不都合なことの半分くらいは忘れ、ただ彼が鳥の習性についてわたしを満足させる説明を与えることができないことにがっかりした。

「鳥の世界のことがわからないのはつまらないと思わない？　こんな森の中に住んでいるのです

もの。鳥類学事典は絶対必要よ」
彼は答えなかった。
そんな専門外の事典を買うどころじゃないと思っているに違いない。
「うんとお金があれば買う?」
「うんとなくても、まあ、本箱を買うより先には買ってもいいよ」
「だったら、元気よく、〈よし買おう〉って言って。あなたが省いている部分くらい、イマジネーションが働くみたいよ、わたし」
「きみは、突如として記憶力がよくなるだろう。ぼくはぼくで、きっと、きみが、約束不履行だと責めたてるに違いないというイマジネーションが働くんだよ。
研究所の図書館で調べてみよう。きっと、生物は自動巻きの時計みたいなものを持っているに違いないよ。そういうのを生物時計というらしい。規則的に何かをする習性を大抵の生物はそれぞれに持っているからね」
「あなたがきまった時間に帰ってくるのは、そういうことなの」
わたしは感嘆して叫んだ。
「地下室に行くドアをきちんといつも閉めておいてね。地下室にはきっと鼠の巣があるのよ。わたし、地下室には一人で降りて行けないわ。ペストのことをずっと考えていたのよ」
「ペストのことは考えなくてもいいと思うよ。ずっとむかしになくなっている病気だからね」
「床が傾いていると、鼠になった気がするわ」
わたしは鼠が床の下で何かをかじっている音に悩まされていた。床のどこかに穴があいていて、そのうち、ぴょんと床の上にその気味の悪い灰色の動物が這いあがってくるのではないかと

怯えた。そして、家の中を点検し、穴はないかと確かめ、かじっている音のする辺りに行ってじっと耳を押しつけたりした。急な傾斜を平気でよじ登るような鼠であれば、斜面に眠ることもまた平気なのだろう。そして鼠に打ち勝つためには、傾いた斜面など気にしてはいられない、鼠の心を持とうと決心したのだ。

「傾いている床と鼠がどういう関係があるのかわからないが」彼は言った。「斜面にいることは、重力について考えるよい機会だよ」

それから、彼は、水道の栓はパッキングをつけ替え、――あり合わせの皮の切れはしなんか使って、――きしむ窓枠は今度の日曜日に直そうと言った。

わたしは少なくとも二つの悩みが解決され、また、他の悩みについてはもっとべつの方面から大らかな気分で考える余地もあることに気づき、そのうち、現に目の前に、それらの不便が大して気にならない人間がいるという事実からだけでも、自分が独りで思い悩んでいたことは滑稽に思われてきた。

「食べものを買って来てね」

わたしはお金のことを言う代りに、彼に買物を押しつけた。

「ああ、そうだ」

彼はわたしにいくらかのお金を渡し、二人はひどいぼろ車で買物に出かけた。

当時は円が自由に外貨に換えられない頃で、また換えられたにしても、どっちみちわたしたちにはお金がなかったが、日本を立つ前に、進駐軍相手の古物商めいたものをやっている従姉のふうに頼んで、省三のカメラやわたしの着物と引き換えにわずかばかりのドルを手に入れて貰った。こちらへ来てから支払われる省三の研究費以外に生活の道はなかった。

円が安かったので、その支給額は日本にいた頃の省三のサラリーの数倍はあったけれど、物価も同じように高かったから、学生並の暮ししかできなかった。

けれど、蒲原の家を出て以来、学生並の暮しができさえすれば、わたしは満足していたし、またそれが続けられることは贅沢なことだと思っていた。

彼はできることなら、わたしに外国の大学で勉強させたいと思っていて、日本を出る前に留学に必要な手続きをさせた。わたしは大学の成績がよくなかったし、自分が学問に向いているとは思えず、また留学生試験に受かるような力はとてもなかったが、もし機会があってそうできるなら、女房業よりはよいにきまっていると考えていた。

省三はわたしから小説を書きつづけられるような場につながる可能性をとりあげたと思っていて、代りのものを与えたかったのだろう。

しかし、わたしもまた、自分がいろいろな意味で彼の可能性をつぶしているだろうと思い、憂鬱だった。

彼は種子学とかいうものをやっているということだが、それがいったいどんなものかわたしには見当もつかなかったし、彼は訊いてもろくな説明は与えてくれなかった。また彼が自分の学問にどの程度の野心を持っているかもわたしにはわからなかった。

「それはまあ、やっているから面白い、何かありそうだと思う好奇心を押さえることはできない、というだけの話だ」彼は言った。彼はどこかに論文を提出して奨学金を貰ったという話だが、それが価値のあるものかどうかわたしにはわからなかった。彼はただその機会を利用して、もっとなにかありそうなところがもう少しほじくり出せるかというようなことをやっているのだろうか。だとすれば、それで食べられるということは、ひどく幸運なことだ。

「何かありそうだと思う好奇心を押さえることはできない」と省三は言ったが、わたしが省三と結婚した理由は強いて言えばそんなことだったのではあるまいか。

彼はわたしにとって初めから何を考えているかさっぱりわからない男だった。安規夫や遙と違って自分のことを言いたてなかった。安規夫や遙や、その他、わたしが親しくしていた男たちはみな、いつもいつも自分のことを喋っていた。だから、わたしはいつも感心して見せたり、それなりの意見を言わなくてはならず、疲れてしまったのだ。

彼らは聞き手が必要な人間だったのだ。わたしは今、彼らの聞かせてくれた調べをなつかしく思い出しているが、それがもう一度奏でられたらどうだろう。次の一節がうまくいくかそればかりが気になって、やはり疲れるだろう。

だが、省三の場合は全然疲れなかった。なぜなら、彼が次にどういう音楽を奏でるかなどということをわたしが考えてやる必要はなかった。それはわたしには馴じみのない音楽だったし、それがよいものかどうかなどと批評する力はわたしにはなかったから。

それがなんとなく快ければそれで充分である。きっと省三の方も同じなのだろう。わたしたちは相手がよくわからず、お互いに好奇心で相手のまわりをまわることを快く思っていた。尽きせぬ好奇心を持ってくれる他人はめったにいない。大抵の他人はわかりもしないくせにわかったような顔をしてそっぽ向くだけだ。

よく知らない、ということなら、このわけのわからない外国の暮しも、省三という男も、大した違いはなかった。直接、自分の五感で会得する以外に、あらかじめ解読されている暗号などなにもなかった。

だが、人間という同類の生きものは、なんとなくお互いに寄っていき、お互いにたぐり寄せた

言葉をほんのわずかでも交換する術を本能的に心得ている。そのためにはまず、自分を表現し、相手を安心させ、相手が心配していることを本気になって心配してやることだ。

だからわたしはのべつまくなしに自分のことを喋り、省三にも何か言わせようとしたが、彼は自分が何を考えているかなどということは複雑すぎて、とてもうまくは言い表わせない、ぼおっとしたわけのわからないものだ、というのである。

「ときどき、なにか、もっとべつのやり方があるんじゃないかな、とか、どっちだっていい、とか、なるほどと思ったり、まあいいさ、と思ったり、そのうち変るに違いない、と思ったりするだけだ。

しかし、なるようにしかならないよ」

日常的なことで彼はわたしにああしろ、こうしろとは何も言わなかったので、家の中のことをわたしは自分で好きなようにできた。

「ぼくは、ただ見ているのが好きなんだ。きみが何か喋っていれば、安心するよ」

彼は言った。

昼の間話し相手がなくて飢えていたわたしは省三が帰ってくると、ぴいちくぱあちくくだらないことを喋り、ときどき疲れて黙ると、彼は「どうかしたの」とプレーヤーが途中でとまったように気にした。彼はプレーヤーに続けて音を出させるためには、どこのボタンを押すべきかと迷っていた。

そのくせ、大して熱心に聞いているわけではないので、すぐ睡った。

実際、彼は睡ってばかりいた。彼が睡るとわたしはつまらないので、からだを両手でゆさぶって眠を醒まさせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com